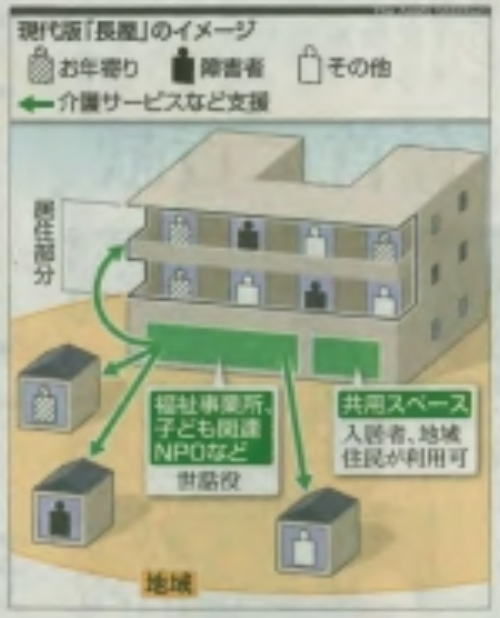
助け合い 今どき長屋

高齢者・障害者・子育て世代「共生」

花本さん（右端）が暮らす賃貸マンションの定例の食事会。発泡酒を手に母子らと談笑した＝広島県東広島市、隅田写す

お年寄りも子育て世代も、障害がある人もない人も、ともに暮らす。こんな現代版の「長屋」＝図＝とも言える住宅がこの春、広島県東広島市にできた。必要な人には「世話役」がいて、地域の人たちにも開放。ハード面でもソフト面でも、バリアフリーをめざしている。

5階建ての賃貸マンション「C－CORE東広島」。201号室に住む花本光二さん(61)は、脳卒中で右半身と言葉が不自由になり、12年前から車いす生活に。障害者入所施設を転々としたが、管理される暮らしに息苦しさを覚えた。今年5月、ここに引っ越してきた。「ふつうの人たちと毎日一緒にワイワイ言って、いまが最高よ」



広島に世話役付き賃貸住宅

マンションの2階から上は1～3LDKの23戸の居室で、障害者や高齢者が4世帯ずつのほか、単身高年者も新婚夫婦も子育て世帯も同じように暮らす。高齢者らを対象にしたケア付き住宅は各地にあるが、ここは「とも暮らし」が特徴だ。60代の夫婦は「高齢者向け」をうたう住宅に抵抗を感じて移り住んだ。

玄関や部屋の入り口の段差をなくすなど、居室はすべてバリアフリー。エレベーターはストレッチャーも入れるほど大きく、「コの字」形に囲まれた中庭への出入りもスムーズにできる。1階部分が「世話役」スペースだ。介護が必要な人には、24時間いつでも対応する訪問介護を担う福祉事業所があり、周辺地域の住民にも対応する。近所に住む岡谷ミツルさん(86)は「老人ホームの入所案内を取りよせていたけど、いざという時はここにお世話になればよろしいなったわ」。夫と死別して一人暮らしで、将来の介護サービス利用を見据える。

1階にはほかに、子どもの居場所づくりをするボランティアの事務所や、車いすでも楽に利用でき、出張もする美容院が入る。こうした「世話役」の事業者は、地域に開き、コミュニティーづくりに参加することが入居の条件だ。

このマンションを企画した「コミュニティシステム合同会社」（東広島市）の岡本悦生社長(61)も住民だ。入居者の募集は、不動産業者のほか障害者の自立支援団体も通した。家賃や敷・礼金は相場並みに。「だれもがにぎやかに、安心して過ごせる住宅をつくりたかった。多少、労力はいるけど、楽しんでやっている」。中庭や1階の共用スペースで地域の人たちと定期的に食事会を開いたり、野球観戦に行ったり。ソフト面でのバリアフリー化も進める。

1階には地域住民の要望を受け、障害者の就労支援を目的に気軽に集えるカフェもできた。地元区長の久保智さん(72)は「新住民が増えて世代間の断絶が大きくなっており、コミュニティー再生の拠点としても期待している」と応援する。

地域力で自立支える

国際医療福祉大大学院の高橋紘士教授（地域ケア論）は「20世紀の福祉は、施設を中心とした『似た者集め』の考え方に支配されていた」と指摘する。高齢者同士、障害者同士で同じ施設に暮らすのが20世紀流。阪神大震災をきっかけに、高齢者向けの住宅に生活援助員（LSA）を配置して地域に根ざした自立生活を支える試みが広がった。

だが、仮設・復興住宅では自殺や孤独死が相次いだ。そして東日本大震災で、「長屋」が狙っていた相互扶助の機能が注目されている」と高橋さん。介護サービスの需要は急増しており、施設に依存する福祉には限界も見える。高橋さんは「東広島の取り組みは、地域力をテコに、共生型をコミュニティービジネスのモデルとして示した点で意味がある」と評価する。

（隅田佳孝）